

門出八島

扱も。その後。詞釋迦に提婆あり孔子に盗妬あり。國に強敵あらずんば名將の譽何を以てかあらはれん。されば亂は太平の始め。文武盛の源氏。九郎御曹司義經は。金賣吉次に従つて陸奥に下向あり秀衡が書狀にて頼朝に加はり。平家の逆徒を鎮めんとす。奥勢十萬餘騎を引率し御進發とぞ聞えける。凡そ三軍をつかさどる御器量。

天然其の徳そなはつて。そなへ行列貝太鼓。地。鏝々々々としてオクリ金鐵。皆鳴る御陣押。牧童樵夫も頭を垂れ。草木も枝をかたぶけり。爰に荒れたる藁屋が軒。奥も限なく見入り給へば。六尺ゆたかの大男。矢の根を磨きてかたへには。地。二八の娘。襦袢さす。針の孔も指貫も。ハツミシ手引き手づまの手もたゆし。御武藏坊辨慶きつとみて。門外につゝ立ち。今日我が君の御

出陣五十四郡の民百姓。渴仰申す折柄。をさめ過ぎたる振舞慮外千萬。罷り出でて一禮せよと呼ばれば。彼の男くつくと笑ひ。いやはや長生すれば新らしい事を聞く。主を持たぬ浪人なれば。我が君と崇めん。人天が下にはおほえず。具足着たがこはくもなし。誰に恐れてへちまのかは。わが寺の佛尊いな。志田の三郎勝平といふ浪人者。此の女は我が妹。身こそ貧なれ今日まで人に禮せぬ此の男と。兩足ぐつと投げ出し。カンオトシ膝を叩いて居たりけり。辨慶こらへず。屬ふみ折らんと駈け出づる。義經馬より飛んでおり。あゝ暫く。志田の三郎とは聞及びし源氏譜代の勇士ぞや。我こそ義朝が八男よ。西國へ同道せん。力をそへて得させよや。オスオトシひらに頼むと宣へば。志田兄弟走り出で。扱は源氏の御末

かと手をつかねて申せしは。誠に源氏の大將の頼むとの御説。御供申すべく候へども。親にて候志田の兵衛。御父義朝公に仕へ。品々の高名恩賞あるべき所に。讒者のわざにて本領を召上げられ候。父が常々申せしは。源氏の賞罰暗き故。讒者は榮え忠臣は衰ふる。カンイロあゝうらめしの義朝や。此の怨は子孫まで。忘るゝなど申しおき。腹切つて相果てし。親の一言骨髄にこたへ黙されず。かく申すとて神八幡平家に従ふ所存なし。土を嘗め水を飲み。餓死せんこそ孝行とも義とも我とも申すべし。御説を背くにあらねども。御奉公は御免あれと理をたゞし憚りなくこそ申しける。義經至極ましました。然らば汝に劣らぬ武士を頼んでえさせよ。志田承り。こゝに出羽のながし佐藤庄司と申す者の悻。繼信忠信兄弟の内一人頼むと宣はば。よも違背は候まじと。言上すれば御大將。其の義ならば軍兵を龜井片岡武藏につけて先へ打たせ

。佐藤が館の案内には汝を誘引すべしとて
。地二手にわくる旗の手に。鎧の錦句は
せて弓馬の花。こそ。三夏さかりなれ
さる程に。佐藤兵衛忠信は此の事を聞く
よりも。うれしや義經の御供し西國に赴き
。高名せんと勇めども。兄弟の内一人とあ
るからは。兄の繼信御供を望み。よも某は
上すまじ。え、屈竟の分別あり。是非某が
上らんと。オケリ志田が。庵に案内し。四
郎兵衛忠信お見舞申すといひ入るる。妹の
早姫立出で。兄上は義經公の御供し其の方
へといふ。忠信小聲になり。いや三郎殿に
用はなし。御身に内證を知らせ申す事のお
り。承れば兄繼信とは人しれず夫婦のかた
らひ淺からぬ中と聞いてある。何とさうか
といへば。早姫顔を赤め。御存じの上はつ
つみ申さんやうもなし。はや七月の身も重
し。して此の事が願れしか。いやくさや
うの義ではなし。義經公より兄弟の内一人
具せらるべきとの仰につき。兄繼信軍の供

を望まる。あかぬ別れは武士の道ともお
ほさんが。弟の口から兄の悪性申しにくき
事ながら。こゝをよつく聞き給へ。繼信上方
へ上りなば國へは討死と偽り。京女の妾を
こしらへ軍は半分色あそびと。家來信夫の
小太郎に談合有りしを確に聞く。しかれば
二世の御契すてられ給はん笑止さに。そつ
と内證を知らせ申す。こゝは平に留め給へ
軍の供には弟の役。不肖ながらはて某が參
らう迄と。ハツミシ眞頭になつてぞ語りける
。御女心のはや姫涙も胸に保ちかねよくぞ
お知らせ忝なや。さやうの事を聞くからは
縮りても引止め。西國へやりはせじ。何と
ぞ繼信殿に。ウレヒ逢はせてたべと。泣き
ければ。然らば某達はせ申さん。何かな
しに取付いてめつたむじやうに泣き給はば
。岩木を別けぬ繼信思ひとまるは必定ぞ。
たゞ泣き給へくとつれて宿所に。三夏歸
りけりかくとは知らず。三郎兵衛繼信氏
神の社に詣で。幣奉り禮拜し。源氏の大將

御出陣。願はくは某を御供に具せられ。神
力を以て高名し。譽を残す雲の上。南無や
紫明神とカントシ肝膽碎くゆふだすき。
優にやさしき女の聲。忌垣の内より繼信様
繼信様と呼びかくる。はつと驚き何者とい
へば。立出で袖をひかへ。いや申しお氣遣
な者ではなし。妾は當社の神職行春が娘
。幾代と申す者なるが。御舍弟忠信さまと
。忍びあひにあひ惚の。カントシしんぞいと
しさかはいさは。地命も磯の海を越え。山
を隔てて西國へ。カントシ義經様の御供を。
望み給ふと承る。上方は色所心許なう思
はれて。恥をいはねば理がた。ず。悟氣深
きは生れつき。兄御さまの御意見にてとめ
まして給はらば。今生後生の御慈悲と。ウレ
ヒラシ手を合せてぞ。歎きける。繼信折
に幸ひと。お、道理々々。さりながら忠信
血氣盛にて兄が意見は聞入れず。御身縋り
たかきくどききたすら泣いてとめ給へ。た
だ泣き給へくと。教ゆる處へ忠信早姫來

。佐藤が館の案内には汝を誘引すべしとて
。地二手にわくる旗の手に。鎧の錦句は
せて弓馬の花。こそ。三夏さかりなれ
さる程に。佐藤兵衛忠信は此の事を聞く
よりも。うれしや義經の御供し西國に赴き
。高名せんと勇めども。兄弟の内一人とあ
るからは。兄の繼信御供を望み。よも某は
上すまじ。え、屈竟の分別あり。是非某が
上らんと。オケリ志田が。庵に案内し。四
郎兵衛忠信お見舞申すといひ入るる。妹の
早姫立出で。兄上は義經公の御供し其の方
へといふ。忠信小聲になり。いや三郎殿に
用はなし。御身に内證を知らせ申す事のお
り。承れば兄繼信とは人しれず夫婦のかた
らひ淺からぬ中と聞いてある。何とさうか
といへば。早姫顔を赤め。御存じの上はつ
つみ申さんやうもなし。はや七月の身も重
し。して此の事が願れしか。いやくさや
うの義ではなし。義經公より兄弟の内一人
具せらるべきとの仰につき。兄繼信軍の供

を望まる。あかぬ別れは武士の道ともお
ほさんが。弟の口から兄の悪性申しにくき
事ながら。こゝをよつく聞き給へ。繼信上方
へ上りなば國へは討死と偽り。京女の妾を
こしらへ軍は半分色あそびと。家來信夫の
小太郎に談合有りしを確に聞く。しかれば
二世の御契すてられ給はん笑止さに。そつ
と内證を知らせ申す。こゝは平に留め給へ
軍の供には弟の役。不肖ながらはて某が參
らう迄と。ハツミシ眞頭になつてぞ語りける
。御女心のはや姫涙も胸に保ちかねよくぞ
お知らせ忝なや。さやうの事を聞くからは
縮りても引止め。西國へやりはせじ。何と
ぞ繼信殿に。ウレヒ逢はせてたべと。泣き
ければ。然らば某達はせ申さん。何かな
しに取付いてめつたむじやうに泣き給はば
。岩木を別けぬ繼信思ひとまるは必定ぞ。
たゞ泣き給へくとつれて宿所に。三夏歸
りけりかくとは知らず。三郎兵衛繼信氏
神の社に詣で。幣奉り禮拜し。源氏の大將

御出陣。願はくは某を御供に具せられ。神
力を以て高名し。譽を残す雲の上。南無や
紫明神とカントシ肝膽碎くゆふだすき。
優にやさしき女の聲。忌垣の内より繼信様
繼信様と呼びかくる。はつと驚き何者とい
へば。立出で袖をひかへ。いや申しお氣遣
な者ではなし。妾は當社の神職行春が娘
。幾代と申す者なるが。御舍弟忠信さまと
。忍びあひにあひ惚の。カントシしんぞいと
しさかはいさは。地命も磯の海を越え。山
を隔てて西國へ。カントシ義經様の御供を。
望み給ふと承る。上方は色所心許なう思
はれて。恥をいはねば理がた。ず。悟氣深
きは生れつき。兄御さまの御意見にてとめ
まして給はらば。今生後生の御慈悲と。ウレ
ヒラシ手を合せてぞ。歎きける。繼信折
に幸ひと。お、道理々々。さりながら忠信
血氣盛にて兄が意見は聞入れず。御身縋り
たかきくどききたすら泣いてとめ給へ。た
だ泣き給へくと。教ゆる處へ忠信早姫來

りしが。あれこそ兄よ弟よと。二人の女を面々に隠し置き。やあ兄ぢや人。ふゝ忠信かと。互に知らぬ挨拶は。ハツミラシをかしくも亦殊勝なり。調暫くあつて繼信。此の度わが君西國の御供。兄弟の内一人との御説某罷り向つて高名すべき立願に。參詣せし折から汝は何とて來りしぞ。忠信聞いていやゝ此の度は某御供申すべし。總領の身が討死せば。誰が家を繼ぎ申さん。總じて國を守るは上たる役。一騎武者の働は下たるものの役なれば。是非忠信が御供とぞ申しける。繼信聞きもあへず。おことが詞も一理あり。さりながら其方は若き者なれば核固まらず武者なれず。晴軍覺束なし國に残つて父母につかへよ。今度は繼信向はうすといへば。忠信氣色をそんじ。秋の木の實などにこそ核固まるといふ事あれ。若き者にて晴軍がなるまいとや。これ勝負は老少によるべからず。兄とは生れ給へども晴軍はあぶなもの。只某を上せられよと。

ハツミラシあざ笑うてこそ申しける。繼信腹に据ゑかね。晴軍あぶなしとは。扱は某臆病すべき者と思ふか。を、臆病は目の前よ繼信いよく腹を立て。臆病者の弟なれば汝はなほも臆病ならん。なう恥かしけれど此の忠信は臆病すべき絆なし。貴殿は國に絆され扱こそ臆し給ふらめ。やいさ狼狽者國に心がひかれんとは。我が親は汝も親はかはらねど。此の忠信は志田の三郎が妹はかはらねど。もつては同じ理よ。なう兄ぢや人親に親思へども。さあらぬ顔にて。ふゝそれは誰が事身に覺えなしといへば。忠信ふつと吹出し。必定覺え候はぬかと。姫の手を引いて出でける時。繼信立つて逃げんとす。早姫すがり引止む。忠信悦びそりやそこが泣き所。泣けくと呼ばれば西國へはなう。ハツミラシやりませぬとぞ泣き給ふ。繼信赤面しながら。幾代くと呼ばければするくくと走り出で。忠信様を捨てて

西國へ行かんとは。お心も變りしか。カンオトシどうでもやらぬと縄り付く。繼信そりやそこが泣き所。早姫泣け幾代泣けと。兄弟顔に袖覆ひ。花に鶯時鳥。一度に持つ姿かや。ハツミラシたゞ泣けくるとぞばかりなり。かゝる處へ父の庄司。君を供奉し志田もろ共來らるる。兄弟驚き二人の女を隠さんとす。あゝ暫く苦しからずと押しとどめ。庄司申されけるは。やれ子供よ。君を御供仕り是まで來る事餘の儀でなし。兄弟の内一人頼みたきとの仰を蒙る。弓矢の冥加庄司が老の悦なり。兄か弟か何れ剛なるを參らせんと思ふ所に。兄弟義を重んじて争ふ心底。庄司が子供は剛の者。ヲ、頼もししくとウレヒシうれし涙を。流さるる。扱汝等は忍び妻を持つたるとや。情に迷ふはよき兵の癖ぞかし。二人の上臈嫁に取。子供と思ひ慰まば。庄司は老の樂みあり。此の上は兄弟共に御供申せとありければ。繼信忠信悦びて。ハルトシ男む心のの

のしさを。庄司重ねて申さるゝは。彼等兄弟心は剛にて弓矢擡負ひ打物取り。馬引寄せて打乗つて敵に向ふその時は。千騎萬騎にも劣らぬ者にて候へども。幼きより主を持たず。奉公の道を存ぜず。我が君へ任せ参らする。庄司が心を察し有つて。御目をかけて召使はれ下さるべし引廻してたべ朋輩達。扱汝等も今が親子の別れなり。父が教訓を保つて君に不忠仕るな。今日よりしては庄司を親と思ふなよ。親にも主にも君一人。一命を奉り。身はなき物と心得て。よき敵と見るならば押並べてむすど組み。首取つて名を上げよ。仁義を知らぬは猪武者。兄は弟を介抱し。弟は兄に背くなよ引くとも兄弟つれて引け駆くとも兄弟つれて駆けよ。兄を討たせて國許の父や母が戀しいとて。第一人歸らうと思ふな。弟を討せて兄歸るな。老いたる親さへ思ひ切る。今を盛りの若武者ども心を残すな。今日の門出を末期と極め。潔く討死せば。生き

て親子の對面より。猶しも嬉しかるべきと涼しげには勇むれども。さすが老後の親子の別れ。遮る涙堪きあへず。かくいふは不便故。花のやうなる若者を。死ねとは更には思はぬと。御前をも打忘れ。兄弟に縋り付き暫し。ウソルヲ消え入り泣きさるたり。御大將を始めとし。在合ふ諸武士一同にハツマシ袖を絞らぬ者はなし。然る所へ入間郡の武者所。安西の彈正太郎氏繁。あわただしく馳参じ。扱も平家の一門君御發向の由傳へ聞き。四國八島に立籠り。軍の用意眞最中と承り候。片時も早く御出陣然るべく候と大息ついで申しける。判官聞召し。を尤さぞあらん。さりながら幾萬騎もるとも物の數とは思はぬなり。如何に彈正。是なる者は佐藤庄司が子息。三郎兵衛繼信。四郎兵衛忠信といふ兄弟なり。向後心を合せ。此の度の合戦潔く勵むべしと懇ろに宣へば。彈正承り。扱は聞及びし御兄弟にてましますよな。誠に御器量と申し適お侍候。されば軍は勢の多少によらず。只一心の勵み第一とかや申し候。貴殿達は未だ不軍にて此の度が初めならん。構へて不覺ばし取り給ふな。さあれば君迄の御恥辱ぞと人もなげにぞ申しける。兄弟むつとせき上げしが。押し鎮め。いかにもく御仰の如く。我々兄弟はつひに軍とやらんは如何やうに働き候も曾て存ぜず候。併しながら貴殿の指圖を以て随分勵み申すべし若し又軍の次第により先驅生捕分捕高名は仕り勝にて候間。必ず御氣にかけられなとカシトシをこがましくこそ申しける。彈正氣色を損じやあ兄弟。昨日今日侍に交り戦場にて高名せんとか扱も口は重寶な物。いはれたりく。よし／＼いらざる先驅致さんより。只我が下知に任せられ。命大事にせられよかし。悪き意見は申さぬと。兄弟今は堪りかねを、この上は何が扱御邊の下知に任すべし。御出陣の門出なれば兵法稽古仕り。

御傳授に預らぬいざ参りさふと太刀に手を
かけ詰めかくる。彈正も飛びしさり。刀を
抜かんとしける時。志田中へ割つて入り是
是此の稽古某實ひ申さん。最前よりの詰開
き皆君を大切に思はるゝ故にてあり。侍た
る者はさ程の人ならでは戰場へは出でがた
し。をゝ頼もししくと。わざと座興に取
りなして事ゆるなく鎮めしはハルトシ誠に文
武の侍なり。調判官御覽じ志田が料簡々々
以て至極せりいかに雙方の者ども。構へて
意趣を残すべからず。此の度の出陣は義經
が一生の晴軍ぞ。随分動め面々とカントメ勇
みにいさんでそれよりも。西國さして發向
ある門出めでたし千秋樂。目出たかりとも
なか〜申すばかりはなかりけり。

第二

さるほどに。調判官義經。頼朝卿の代
官を蒙り一の谷を攻め破り八島に御陣をめ
されける。奥州勢の彈正太郎氏繁は。佐藤
兄弟に意趣ある中。我が手の者を役所に集

め。扱も此の度源氏の勢。我等を始め大名
小名歷々多き其の上に。何を不足に佐藤兄
弟召出され。此處にては繼信彼處にては忠
信と人もなげなる侍だて大將も目があかず。
見聞くも無念千萬なり。何卒ひけ付け恥辱
をとらせ。小言吐かば打殺せ。彼奴等一騎
當千と御頼みある上に。入ざる忠を勵み犬
骨折つて鷹にとられな。軍せんよりは佐藤
兄弟討つてとれと。濱邊をさして下りしは
法に背きしキホヒ三重へ振舞なり。ユリ引フシ
けに思ひても。地思ふにあかね親子の中。
聞いたはしや佐藤庄司。繼信は小櫻織。忠
信は伏繩目の鎧を常々好みしとて。俄に織
させ。信夫の小太郎同じく小二郎兄弟に取
持たせ。地二人が方へ送らるゝオクリ親の。

心ぞあはれなる。地霞と共にたつか弓。八
島の磯に着きけるが。陣所々々を見渡せば
。竹東亂杖茨き捨てし。所所の篝火も。夜
は燃え盡は消えつゝうす煙。鹽屋の煙立ち
つゞき。調方二三里が其の間。逆茂木きび

しく引きたれば。佐藤殿の御陣所は。いづ
くと問はん便さへ。地浪打際に來る人を。
蟻かと見ればさもなくて。地十六七の小童
の。腰に差いたる山刀。さすが品よく大人
びて。姉とおほしき振袖に。持つも似合は
ぬあきなひやハツミラシ草鞋賣には惜しかりし
。調信夫兄弟これ子供。草鞋買はんといへば
。いや是は武者草鞋。旅人の御用にはた
ずといふ。ふゝ陣所に商するからは。あれ
に見えた陣屋々々誰々と知りつらん。慨畧
語つてきかせよかし。やすき間の御事なり
。毎日商致す故御陣所役所は存じたり。教
へ申さん聞き給へと東西南北指さして。ね
んごろにこそ語りけれ。

役所づくし

地あれ〜東の尾上より。南の岡の小松原。
雪の山かとひた白のハツミラシ幕を其の儘籠
川。空堀はつて高槽。風にうづま〜白旗の出
。かけに軍兵兜をならべ。地鎧の袖をつら
ぬしは。御大將の御本陣。其の旗本に打續
島

き。地抱笹抱抱。オドリシシ花うつほ。地浪に

兎の印こそ。龜井片岡伊勢駿河。獨鋤に輪

寶付けたるは。常陸坊海會。マヒシシ兼房は

右巴。一つ巴三つ巴。五つ輪違六つ雁金。

七つ道具を立てたるは。大將の膝元さらす

。武藏坊辨慶の。ハツミンシ役所とこそは教へ

けれ。地前は逆茂木颯々として。井樓高く

揚けさせ。用心厳しき勢は。ハツミンシ先手の

大將佐々木殿。扱竹垣に折木戸打ち。地轍

ばかりを立てたるは。フシ旗本の母衣大將

熊谷。殿の陣所なり。地川越が物見小屋。

ギンシ松にかけたる。太鼓鐘。地明けゆく

床を驚かすカカリセツウリ雪に朝日の微こそ。

地軍大將畠山。手勢は五千餘騎とかや。扱

一重菱入り子菱。花菱松皮三蓋菱小笠原の一

黨なり。二つ引の大幕は。平山の陣所。澤

潟は小山の一類立波は小栗黨。北條は後備

へ。右陣左陣は土肥三浦開き扇の旗を靡か

せ。騎馬の武者二三十。御用心と呼はつて

屋巡り。濱の手は鎌倉勢。扱山の手は都勢

。巨楠持柄雛羽につき並べ。徒武者騎馬武

者弓弦を瀧し。すはといはん聲の内。駈出

でん氣色にてキホヒシシ君を守護し給ひける。

誠にゆゝしう候ひし。地頃は彌生の空なが

らフシ秋に。さえたる月に星。ハツミンシ千葉の

介の役所なり。滋目結は結城の七郎。龜甲

は佐原の十郎。三本團扇鱗形。風にもまれ

て上り簾。又下り藤揚羽の蝶武藏勢相模勢

一二の備と聞えける。扱奥方の軍兵は。十

萬餘騎を二手に分け陣所は大手搦手。中に

立てたる旗の紋。雪折れ竹に群雀出羽の庄

司がへ二人の子佐藤繼信忠信は。日本無雙

のつはものとキホヒシシ敵も味方も隠れなし。

其の外浦々山々も皆白妙に白鷺の群れるる

松見れば。源氏の旗を靡かする。多勢は限り

知られずとハルオーシシ残りず教へ語りけり。

調信夫兄弟手を拍つて。扱もよく覺えたり

我々は佐藤殿の家人。父御の方より御兄弟

してくれぬかといへば。娘悦ぶ色見えて。

御案内も致すべし。扱なれしう候へど

も。我々は此のあたりの狩人。鷲尾と申す

者の子供なるが。源平の兵亂にて獵もかな

はず。親を養ふ營みに習はぬ草鞋賣り候。

あはれ殿様へ御奉公せさせてたべと言ひも

あへぬに信夫兄弟。是は幸ひ戰場には一人

も便りぞや。吉左右。我々に任せよ。地

よき奉公に肝煎らんと連れて陣所に。三重

急ぎけり。明くれば三月十八日。大將軍の

御服装。赤地の錦の直垂。紫樹濃の御着長

。鑑ふんばり鞍蓋につつ立ちあがり。調一

院の御使。檢非違使五位の尉。源の義經と

高らかに名乗つて寄せくる平家の兵船をハル

オトを今やくと待ち給ふ。調佐藤兵衛繼信

は父が贈りし小櫻織。綿上高に着流し。今

朝まで着せし鎧をば鷲尾に打ち着せて。馬

を乗り捨てハツミンシ御馬の前に畏る。調大將

御覽じかれは如何に降人か。いや是は繼信

ん爲召連れ候と申せば。判官重ねて。繼信が弟は忠信ばかりと覚えしに心得難しと宜へば。繼信謹んでさん候。彼は此の邊の狩人鷲尾の三郎と申す者。人と生れし思ひ出に待に交はりたきよし。彼が姉たつて嘆き候故。色しらぬ東夷あづまのやの繼信め。志にほだされ兄弟の約諾仕つて候。あはれ御馬の口に召付けられ候はば。有難く候はんと申し上ぐれば。義經殆ど悦喜えつぎあり。速器あつぱり量の若者。繼信は果報者あやかりたし。いかにも某召使ひ弓取となすべきが。とても事の序なれば。姉はどうぞなるまいかと。戯れ給へば。鷲尾は鎧の袖を顔にあて。地恥かしさうなる武者振に。ハツミシ敵も太刀をば捨てぬべし。安西の彈正太郎後陣よりつと出で。繼信殿の御弟お近付になり申さん。やあはは此の頃陣屋にて草鞋賣つたる童わらわなるが是が貴殿の御舍弟か。はてよい弟をもたれたり。向我まがう我等も得意になり。草鞋あつらへ申すべし。軍中に用ふるからは。

百里も二百里も歩まるゝよき草鞋が求めたし。値にはかまはず。明輩の中なれば五錢あたい三錢は。只も取らせてやらうわとハツミシあたいも悪體にぞ申しける。繼信はむつとせきあけしがを、易い事易い事さりながら百里二百里穿く草鞋何の用に入り申す。ふゝ合點てんたりく。臆病風に寒氣立ち。大敵に追つ立てられ本國へ一飛びにカントシ逃け行くための草鞋か。■をゝやすい事といへば。彈正重ねて是さ何にもせよ。我が脛すねは人に變つて遅し。是に合せて作つてくれと。土足を繼信が膝元に踏出す。繼信太刀に手をかけ。ほゝ見事なだんびらよ。此の足に逃けたらば天竺までも一飛びならん。養老骨切取つて形に合せて作らせんと。太刀を抜けば彈正も飛びしさつてすばと抜く。土肥佐々木島山。辨慶など左右にすぎり。■是は不吉と鎮むれども。放せくとねちあふ所に。平家の兵船漕ぎつれて関の聲をぞ三へあけにける其の際ひまに同士どうしいくさも。

やうやう治め鎮まりぬ。■三人乗つたる小船磯近く漕寄せ。大將船端に立上り。一品式部卿。葛原の親王九代の後胤。能登の守教のり。源氏の大将義經に見参の印しるしに。小兵ながら中差を参らせん。受けて御覽候へと大音上げてぞ申さるゝ。判官陣頭に駒かけする。ヲゝものくし。能登殿の御弓勢關東迄も隠れなし。直中に受留めて。九郎が鎧の札しるし試し度う存するなり。こゝの程が所望ざふとカントシ胸を叩いて宜へば。■すはや源平兩大將。安否はこゝぞと敵味方。片唾を呑んで見る所に。小櫻絨に鹿毛の駒。味方の陣を一文字に乗分けて。矢面に駈塞かそくがり抑も是は出羽の庄司が總領。佐藤三郎兵衛繼信とは我が事なり。本國を出でしより露命は君に奉り。屍しかばねは八島の魚口に與ふ。能登殿の大矢を某試み仕り。閻摩の帳まくらの巻頭まきだてに訴へん。矢壺は君と同然と。弦走しんそうを三度撫で。につこと笑うて待ちかけしはオトシ眼を驚かす有様なり。■教經は仁ある大將

感じて流石放ち得ず。菊王しきつて獎むれば又けにもと思はれけん。五人張に十五束。からりとつがひ引きしほり。暫しかためてえいやつと切つて放せば。誤たず繼信が胸板に。羽ぶくらせめてはつしと中り。血煙がばつとたつ。繼信弓矢打番ひ。答の矢を放さん響かんと三度四五度しけれど。魂ぐらみ息もきれ。左手の鐵蹴放つて。右手へかつばと落ちけるは。カントシ無懈なりける次第なり。菊王は首取らんと下立つ所に忠信遙に放つ矢が。左の膝にすはと立ち控と伏すを能登の守。舟より飛びおり菊王が。上帯摺んで船底へ投入れ給へば。大力に打付けられ。微塵に碎けて死してんけり。是を見て平家の軍兵。舟を乗捨て我先にと。陸へさつと打ち上る。兄繼信が孝養と忠信眞先かけければ驚尾三郎信夫兄弟彼等についで。源氏の兵駈けちがへ入れちがへ揉みにもうぞ。三三三珠數繫

ぎにして引きすり來り。討たれし者の追善に首珠數を思ひ立ち。今少し足らざれば。奉加に入つて給はれと。長刀取りのべ切つてかゝれば。寄手はさつと引いたりける。え、吝しい事。後生に何が惜しいぞと。逃ぐる敵を追ひ廻し。ねち首打首胸ぎり筒拔。牟禮高松を縦横に。おつ返しおひ戻し。討ち立てく斬り廻るは凄じかりし。勢ひなり。浪に漂ひ失せしもあり。人馬にせかれて死するもあり。かなはじと平家の勢。飛乗りく舟は沖。陸は陣所へさつとひく。辨慶は立歸り。討取る首を繋ぎそへく。を、是でこそ珠數一連。百八煩惱らんより。後生が大事南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と念佛し。カント本陣さして歸りける。通草駄天婆羅門天。鍾馗大臣獅子王の。あれたる姿もかくやらんと皆感ぜぬ。

群れるる鷗立騒ぎ。地と渡る舟の梶の音。しんしんとして物淋し。関の聲矢叫びも。ツミシ磯打つ浪に引きかへて。地移りかはれる境界は。明日の身の上思はせし。哀れ催す沖つ風。磯山櫻かつ散るも。カントリ心を碎く種となり。地いともす。き浦曲かな。繼信が忠勤義經感し思召し。今一度對面せばや。尋ね來れと忠信仰を蒙りて。信夫兄弟左右に具し。泣くく御陣を出でけるが。いざ立ち別れ尋ねんと。地鹽屋の辻より主従は三方へこそは。三三三わかれけれ。

フシまだ宵闇の。潮もり。浦さび渡る春の夜は。心ぞ秋の夕なるに。洲崎の堂の西東。牟禮高松の北南。奥州の佐藤殿やおはするか。繼信殿やおはするかや。君よりの御誕にて。弟の忠信が。御迎ひに來りしと。地靜に呼うで通れども。答ふるものこそなかりけれ。今朝は兄弟連れたりしに。今宵始めて一入行く。八島の浪の音までも。

かくてその後。夕霞八島の浦の松暗く。昨日に變る心してなう繼信殿兄上と。呼ば

第三 第一 第二 第三 第四 第五 第六 第七 第八 第九 第十 第十一 第十二 第十三 第十四 第十五 第十六 第十七 第十八 第十九 第二十 第二十一 第二十二 第二十三 第二十四 第二十五 第二十六 第二十七 第二十八 第二十九 第三十 第三十一 第三十二 第三十三 第三十四 第三十五 第三十六 第三十七 第三十八 第三十九 第四十 第四十一 第四十二 第四十三 第四十四 第四十五 第四十六 第四十七 第四十八 第四十九 第五十 第五十一 第五十二 第五十三 第五十四 第五十五 第五十六 第五十七 第五十八 第五十九 第六十 第六十一 第六十二 第六十三 第六十四 第六十五 第六十六 第六十七 第六十八 第六十九 第七十 第七十一 第七十二 第七十三 第七十四 第七十五 第七十六 第七十七 第七十八 第七十九 第八十 第八十一 第八十二 第八十三 第八十四 第八十五 第八十六 第八十七 第八十八 第八十九 第九十 第九十一 第九十二 第九十三 第九十四 第九十五 第九十六 第九十七 第九十八 第九十九 第一百

んとすれど聲立たず。フシ峰にひびくは松の風。地吉屋の方にかすかなる。手負の聲の聞ゆるを。嬉しやそれかと走り寄りければ。群れて友呼ぶつま千鳥。ばつと立つては亂れ行く。後の山に聲するは。信夫が呼ばふこだまにて。繼信とも佐藤とも。答ふる者はなかりけり。今は力もつき弓の。ゐるかひなさに駆けめぐり。なう兄上はおはせぬか。繼信殿やおはするかと。聲をばかりに呼立て呼立て。ウレヒヲシ又伏伏み歎きけり。地むさんやな繼信は。詞精兵に急所を射られ。大事の痛手といひながら死にもやらず。片割舟の片蔭に漂ひ伏してゐたりしが。弟の聲と聞くからに。地漸々に這出で。忠信かと聞くと嬉しく走り寄り。調未だ存命ましますかと。縋りついて抱き起し。額をおさへ御傷はいかにと問ひければ。地今を限りの繼信は。我が身の事はさて置いて。君は如何渡らせ給ふぞや。御身は傷をも負はざるか。

にさへ。弓矢取る身の一言と傳へ。ノルンキくだに哀れなり。地忠信涙をおさへ。君も我等も恙なく。軍は味方の勝利なり。御供申せとの仰なり。具し参らせんといひければ。お、嬉しし。最期に君を拜し御前にて死すべきぞ。つれて参れといふ所へ。信夫兄弟断來り。兎角しつらひ洲崎の堂の破れ戸に。地繼信を抱き載せ。前を忠信後は信夫が昇き添へて。涙にしをれ。たどたどと行くや。東の中三重の山の端に。フシ月ほのほのと。出でにけり。地鷲尾の三郎は。繼信が志血をこそ分けね兄弟と。ハツミヲン結ぶゆかりの草の縁。地死骸を取置き首を敵に渡さじと。地せき来る涙も武夫の。八島を尋ね巡りしが。面は血に染み俯伏しに。伏したる手負のありけるを。是やはと能く見れば。兜の鏝草拵まで散り積りたるさくら花。鎧の糸を埋みたり。涙に曇る臆月小櫻輪と心得て。是こそは繼信殿とウレヒヲン抱きついてぞ。歎きしが。地此の世なら

ぬ御厚恩。最期のお供と存すれども。高名もせず相果てば。世の人口も候へば。よき敵と討死し。やがて追つ付き奉らん。今よりは君なくして。誰にか見せん我が姿と。指副抜いて前髪切り。口おし割つて含ませ。二世の契りの印ぞと。ウレヒヲシ又さめんと。泣き居たり。調かくとも知らで彈正太郎。繼信を殺し鬱憤を晴さんと。夜半に紛れて歩きしが。この體をきつと見て。やあ鷲尾か。君よりの御説には。繼信深手を負うたる由。敵に首をとられ見ぐるしき死をさせんより。腹切らせ首討つて参れとの御事なり。そこ立退けと太刀ふり上ぐる。鷲尾手負に立ち掩ひ。カン調あ、暫くく。深手負うたらば看病せよとこそあるべけれ。腹を切らせよとは心得ず。殊に忠信某をさし置き。遺恨深き貴殿に仰付けられんやうなし。死骸は我々片付け申すといへば。扱は御説を輕んずるか。いやさ何にもせよ繼信が首御邊には討たせぬと云ふ。え、わつ

ばめ小頼者と。打つて
 掛るを受けけれども。
 さんぐにおつ立て。
 走り返つて首打取り。
 ハルトシ行方知らずな
 りにけり。 鬘尾續い
 て立ち歸り。南無三寶。
 敵にさへ取らせぬ首味
 方に取りられし口惜しさ
 よせめて死骸を葬らんと。
 引起せばこは如何
 に。 鎧に付いたる櫻花
 ばつと散つて小櫻と
 見えしはもとの深山水
 や。 黒革絨の鎧なり。
 袖標をちぎつて見れば
 能登殿の郎黨 筑紫
 の孫六安國としるせり。
 ふ、扱は繼信殿にてな
 かりしな。 まづ嬉しと



さして行く鹽屋のか。

たへぞ キホヒ三重 急ぎ

ける既に夜半やはらの時も過

ぎ。御本陣には義經

諸大名列坐あり。繼信

が噂のみ如何いかなりける

不便ふべんやと。大將心を惱

し給ふ。所へ佐藤繼信

を召具せしと言上すれ

ば。それ此方こなたへと寄せ

させ給ひ。御膝を枕と

せさせ。扱も／＼不便

の者の有様や。いかに

繼信。おことは義經が

命に代り最早死せしと

思ひしに。生顔いきがほ見たる

嬉しさよ。心に怒る事

はなきか。國許へいふ

事あらば何事なりとも

申しおけ。諸侍は多け



れど、親とも子とも某を。父の庄司が頼みし故、義経も今日迄は。命を二つ持つたりしが。只今汝に別れん事の便なさとウレヒ

御落涙ぞ有難き。同稍あつて繼信眼を開き。名残惜しげに御顔を見上げ見下し涙を流し。忝しといふ聲も。じどろに纏れ

微かなり。同忠信涙にくれて居たりしが。手負に力をつけん爲。ええ言ひがひなし繼

信殿。横五郎景正は烏海に眼を射られ。七日が内に答の矢を射返ししと承る。それ程にこそあらずとも。などや御前にて返答は

直はぬぞ。忝くも枕許は相傳の我が君。弓手は秩父馬手は和田。土肥佐々木武藏坊。

かう申すは弟の忠信にて候と。ウレヒン聲をあら、け。言ひければ。繼信は枕をもたけ。同何條其の景正に劣るべきにあらぬど

。三國に隠れなき。能登守の太矢を直中に受けとめて。繼信なればこそ物をば申せ

敵味方の目を醒し。しかも我が君の御膝にて死する繼信が。何に心がひかされて。

いふべき事のあるべきぞや。御凱陣の御供して。奥州に下向せば。繼信こそは我が君の御用に立ち。源平の目を驚かし死したれば。雪折竹の逆まの。フシ世を欺かせ。

頃書き置いて。守袋に残せしぞや。やれ忠信。男は高きも卑しきも。若きとて人ゆる

さず。短氣は未練の初めと知れ。君に不忠存するな。朋輩達に慮外をすな。野中の案

山子濤標も。ひとり立たぬ世の中ぞ。必ず人に憎まれな。やれ妻子をも常々は。ふ

つつと思ひ切りしかど。恩愛の捨てがたさは。只今のなつかしさ。繼信程の者なれど

。かねて覺悟も最期には。變るものとは今ぞ知る。是もおことが手本のため。語り

置くとばかりにて。絶え入る眼の中よりも。涙をばら／＼と流し。いふべき事も是ばかりの三郎は繼信に離れ。味方に力なき故に平

和田殿武藏殿はおはせぬか。忠信に目かけたび給へ。南無や西方彌陀如來と。手を

合せ目をふさぎ。惜しかるべきは年の程。二十三のまほろしも。八島の磯の浪の泡。消えて果敢なくなりにけり。忠信わつと取りつけば。君を始め奉り。近習下部に至るまで。一度に是はと聲を上げ惜み。ノルフシ

嘆くぞ道理なる。地判官御涙の下よりも。捨果てし身もながらへて。あればある世に

如何なれば。惜まるゝ身は止まらぬ。いかなる縁にか主となり。いかなる者が家人

となり。かゝる哀を見る事よ。父義朝は知らねども。兄鎌倉殿蒲殿に別るるも斯くあらん。來世も必ず主従ぞと。忝くも繼信が。

死骸に縋らせ給ひければ。鬼を欺く辨慶も。むせかへり／＼。ウレヒン聲も惜まらず。歎き

ける。同かゝる所へ彈正太郎あわたしく駈け來り。すは御大事こそ出來候へ。鷺尾

の三郎は繼信に離れ。味方に力なき故に平家へ注進と存じ候。其の仔細は只今敵の忍

びの者某討留め候所に。却つて某に敵對をいたし既に太刀打に及びしを。鬼角切抜け

敵は討留め候と。以前の首を差出す。鷲尾續いて伺候すれば。人々一度にはらりと立ち。鷲尾を取廻す三郎少しも騒がずあゝ是々御騒ぎ候な。全く左様に候はず。これ安西。一匹の馬が狂へば千匹の馬を狂はすとは御邊が事よ。某を讒するのみか。死したる敵の首取つて忍びの者を討つたるとはいかに。彈正聞きも敢へず。然らば汝は敵の首取る某に。何とて討つてかゝりしぞ。これ二心の證據といへば。一座の人々鷲尾如何にとつめかけゝる。鷲尾涙をはらくと流し。カン調申し上ぐるも悲しやな。情の兄の繼信が。行衛を尋ね出づるにて。詞心も亂れ散る花に埋れし鎧を繼信が。小櫻絨と目も暗み。嘆き沈みし折柄。繼信が首討つとの御説なりとて。理不盡に斬り取つて歸り候。證據には其の首の口を割つて見給へ。鬢の髪びんの候べしと。申しもあへぬに忠信。口押割つて見てあれば。一總ひととの黒髪あり。辨慶物も言はず突つと立ち。安西が綿上欄

んで。えゝ畜生劣りの悪人。問答するも無益の沙汰と。木戸の外へかつばと投げ。あお構ふな忠信。構ふな鷲尾。まづ繼信を辨慶が。引導してとらせんと。オクリやがて衣を着しける。義經をはじめ大名小名残りなく。死骸に手をかけ給ひける。其の時辨慶珠數おしもみ。汝元來鐵石の如し。極樂もいや地獄もいや修羅道に逗留し。討たれて死する平家の勢と。冥途にても合戦して。釋迦彌陀の睡をさまし。行きたい方へつと行けと。陀羅尼真言くりかけ。ヒヤウシくりかけくくくよみかけてカシメ野邊に送れる春の夢。覺めての後の末の世まで。ためし稀なる武夫やと皆感ぜぬ。ものこそなかりけれ。

第四

かくてそのうち。佐藤庄司の御館へは嘆きを憚り。忠信よりわざと便もせざりければ。庄司一家の人々は夢にもかくと知り給はず。胎内にて別れつる繼信の一子。

誕生せしを繼若と名付け。西國よりの便をば明けぬ。暮れぬと待給ふ。兄弟はつね々々作庭を好みしに。凱陣せば見すべしとて。様々の木草を植ゑ。岩ぐみ遣水心を盡し。伊香保の沼よりよき松を見立てさせ。數多の人夫持來る。庄司夫婦二人の嫁。庭におり居て見給へば。松の枝血に染まり朱になつて見えければ。人々氣にかけ人夫を召し。いかなる事ぞと仰せける。人夫承りさん候。以前は軽く見えし故。人夫二人にして持ちければ。抜群に重くして取落し。先の夫は何事なく。次の夫が打たれて靴を蒙り散々の事といふ。はや姫驚きやあ何といふ氣かゝりや。いひ直せとありければ。はて何と御聞きなさる。此の松の木を取落し。先の夫は何事なく。次の夫が討たれ候。定めて命はあるまいと。物が言はせし辻占は。ハツミン後ハツミン後にぞ思ひあたりける。人々興さめ顔を見合せフシ暫し詞もなかりしが。庄司縁を取りかへおゝめでたしく。

小松は平家の大将繼信が討つたるぞ悦びの酒宴せんと奥に立入り給へども。早姫猶も落付かす所詮我が兄の志田の三郎殿を頼み。此の子を連れて西國へ下らんと。旅の營みそこくくに。繼若をかき抱き。兄の庵に忍び行き。兎角語らひ兄弟は西國。方へと。三重急がるる。

はや姫道行

フシなじみの雲の。地あけほのや。月に名残りて思ふには。前に我が夫後に親。思ひ切る瀬と切らぬ瀬の。中に立ちたる濠標。フシ此の身をつくす哀さよ。地されども志田の

三郎は、妹に力を添へ。地繼若を愛しては。目だに覺めたら背にきつとおひの殿。上カン歌ねんくねこね。吾せでおよれ。神へまゐる。地舞行くかた。いづこ水壑の。地岡の葛原風さわぎ。恨みつわびつ世の中の。苦は色かへて青葉山。引馬の野邊に立つ鹿も。妻戀ひかねて歸ろとなくはしをらしき。地男模様の衣の關。霞の關の七重八重。ギンハ

ムシ卯の花まがき藤散りて。地初時鳥はつ。フシ猿は山王まさるめでたき。地御代のしる聲を。苦屋の煙一すぢを。二つ割なる常陸帯とけて語りし睦言を。地あだに那須野の春の夢。

消えつゝ夢の通ひ路を。我にな來そか勿來の關。フシ花の名残の。浅香山瀧つ。ノルフシ流は丈長に。地ひゞきを風にした、ませ

て。平元結の黒髪山。分け行く末は武藏野の。草にあこがれ露にねて。今日四五日目に刷れし。富士さへあとに三河の國。地過ぎて尾張の渡舟。セツリ乗りて走りて伊勢もはや。地とまらぬ關の地藏堂。ヒトリに似合ひくのつま授く誓くちすな。地朽なばくちよわが中の。戀は埋まぬ土山や。地近江の湖は春ふけて。水のみどりも影うつる。地繁りし峰は八王子。廿一社の神所。地



しは松本の松は鋭く柳は蠟手に。竹はしなへて伏見の里。江口神崎西の宮。夕日のにしき唐紅にゆく水をくくりくくくくるくくくと水くくる。笈つたひの里を越え。川を越えつゝ山越えて。谷を越えても一の谷。又二の谷三の谷。こゝも此の度つはもの兵。カン拍子ヲシ庫の津より追風の船は三つ羽の八島の浦。浦波かけて蘆ふける柴の庵に三重へつき給ふ。

納庵の内へ物申さんとあれば。主の女房をあけ。此處は源平の合戦未だ治らず。他國の人にはむさと宿は參らせず。何方よりと問ひければ。志田聞いて我々は出羽の國佐藤が所縁の者。軍の次第兄弟が有様聞かまほしく。道を上り候といへば。彼の女聞きもあへず。扱は左様に候か。自は此の所の狩人鷲尾の三郎と申す者の姉なるが。繼信様の御蔭にて弟は源氏の侍となり。御恩を受けし者候。軍は未だ終らねども。平家は大方滅びし由。繼信様の御事は能登殿の

矢にあたり。果て給ふとやらん聞きしかど。女なれば戰場へ出たる事も候はず。委しくは存ぜぬなり。いざ弟の鷲尾が陣所へ伴ひ。直に様子を問ひ給へといへば。志田悦び。然らば御供申さんと。早極繼若庵に残し。彼女の女と打ち連れてカハリオトリ陣所を。さしてぞ念ぎける。地痛はしやな早姫は。繼若をかき抱き主の女の物語。もし誠ならばいかせん。あはれ憐れなれかしと。たより待つ間の待ち遠く。袖も心もくづをれてオトリとつり。くくの仇睡り。調枕が上に駒の足並。響の音に夢さめて。庵の内に入り来るを見れば。夫の繼信小櫻藏の物の具かため。しをくとして見え給ふ。なうわが夫が繼信殿かと抱き付き。ウレヒシうれ



し涙を。流せしが。調やあつて能登の守

の矢に當り。御最期とも聞きし故いかばかり案ぜしが。是は嬉しき御事とあれば。お既に死なんとしけれども。胎内にまき捨てし情の胤のみどり子に。心ひかれて潮

つて。生死の海の厚氷とくれば味方むすべば敵走りかゝつてはつしと打つ。打たれてさつと引汐の。又さしくるは五逆の太刀。猛妄執の山廻り。スカスシ消えて。形はなかりけり。繼信庵に走り入り。見給ひたる

哀の限りなり。早姫涙の隣よりも。くどき給ふぞ道理なる。扱もく自らほど。世に蔑ましき者はなし。假初に馴れ参らせ。三歳に足らで別れし事。宿世いかなる報いぞや。せめて思愛の好みには。今一度繼若

ども。しばしの暇賜はりて。是迄は來りしと。ウレヒシ又さめくとぞ。泣き給ふ。時に山鳴り谷應へ。天地六種に震動して。大地も裂くる如くなり。繼若わつと泣きければ。いや苦しからず。又こそ平家が寄せ來る。一軍して駈け散さん。見物せよと

かあの如く。日夜の軍は繁けれど。妹背の契此の若に逢ひた見たさに。來りしと。繼若膝に抱きのせ。ウレヒシ涙にくれて。見えにけり。かゝる所へ志田の三郎鷲尾兄弟。忠信諸共歸らる。早姫走り出で。なうおそかりし繼信殿も待兼ねて御入り候といふ。

我が妻かと。などや詞をかけ給はぬ。なう繼信殿くと。かひなき鎧に抱きつきうレヒシ伏し沈みてぞ。泣き給ふ。誠まことに故郷の庄司殿。かくなり給ふとは露しろしめされずし。やがて凱陣し給はんと。明暮待たび給ふらん。是につけても過ぎし頃。造庭を綺麗にとて。板よき松をもとめ給ひ。兄弟が歸りなば。馳走に植ゑ置き見すべしとて。數多の人夫もち來り。重くて過ちしたりしと。いひし詞の氣にかゝり。心許なう思はれて。取りあへず上りしが。心しくならせ給ふとの。扱は告にてありしよな。生は死の基違ふは別れといひながら。思へば思へば悲しやと流涕。ノレフシこがれ泣き給ふ。忠信涙を止めかね。扱は現

打出づれば。平家は寄せくる波の面に。大將を始めとし一門の月暈雲霞の如く。カ、リセモ嘆息の鈍先我慢の劔。刃を揃へあらはれし。空の景色も引きかへて。カントシ彌生半の春の色。今日けふの修羅の敵は誰そ。おぬ。其の一念の怨の矢先。思ひぞ出づる壞

は夢ばし見たるか現かといへば。はて最前より御出でにて。繼若を寵愛しますます。先づ入つて逢ひ給へといひけるにぞ。猶しも不審晴れねども。庵に立入り見給へば。南無三寶繼信が面影は小櫻緋の物の具に。繼若ばかり抱き付き。ありし形はなかりけり。早姫是はと縋りつき。なう繼信殿わが夫とよべと叫べど。かひぞなき物の。ノレフシ

思へば思へば悲しやと流涕。ノレフシこがれ泣き給ふ。忠信涙を止めかね。扱は現

死の。海山一同に震動し。五塵六慾の風立

夫とよべと叫べど。かひぞなき物の。ノレフシ

泣き給ふ。忠信涙を止めかね。扱は現

に魂の妻子を慕ひ來り給ふか。などや某にも見えさせ給はぬ兄上と。鎧にすがり嘆く

にぞ。鷲尾兄弟物に騒がぬ三郎も。小手草摺に取付きて。人目もわかす泣叫ぶ

シ目もあてられぬ。次第なり。安西の彈正太郎は御前にて恥辱を取り。武士の交りならざるも。いよく彼奴等がなす業と一

味の惡黨引具し跡よりつけて來りしが。扉蹴破り無二無三に込入りける。心得たりと

忠信繼若を抱きとる。志田表に驅塞り。ふ扱は聞及びし安西な。愁に沈みし弱身を

くひ我々を討たんとは。己れは命に持ちあぐんだな。軍せまいと誓文は立てたれども。

汝を殺すは鼠ぞと。云ふより早く引摺み押つ伏せ。側なる大石おつ取つて。脊骨にど

うと押しかけ。さあ鼠殿ちうともいへと。地獄落しに押しつければ。五體碎けて死し

てんけり。猶も進む奴ばらを四方へはつとおつ散す。人々悦び立ち重り。日頃の遺恨

を散せし事。亡者も悦び給ふべし。いざや

著提を巾はんと。かねて繼信歸依したる。都法然上人を。頼み申さん此方へとてカン

ト都路さして上らる。源平兩家の物語。物の哀は多けれど。かゝる例は上古にも。

又末代にもあるべからずと皆感せぬ。者こそなかりけれ。

第五

かくてそののち。四海波靜かにて國も治る時つ風。早打の使として源八廣綱院の

御所に馳せ参じ。扱も九郎判官義經朝敵追討の院宣を蒙り。八島壇の浦赤間門司が關

所々の軍に平家一門悉く討ち滅し。宗盛父子を生捕り。天下太平の御代と罷り成り候

條。内侍所聖の御箱。事故なく都へ入御な

し奉るべき由謹んで奏しける。法皇御感淺からず。廣綱に兵衛の尉を賜はり。源八兵

衛と召されける。卿相雲客洛中洛外。近邊の民百姓。源氏の御代は萬々歳。ハルトオシ

千秋樂とぞ祝ひける。扱廣綱は御廳近く参り。軍の次第御物語仕れとの宣旨なり。

廣綱承り。宣旨もだし難く候へども。出羽の庄司が伴佐藤繼信と申す者。義經の命に

代り討死仕つて候。彼が親族新黒谷にて追善の佛事取りまかなひ候故。義經が代参と

して回向仕るべきよし申し付け候へば。ま

づ黒谷へこそと申し上ぐれば。尤も殊勝の至りなりと。御暇下さるれば。廣綱悦び。

袖にも餘る身の冥加と退出するこそ。三重の、しけれ西の迎への紫雲山。新黒谷には

繼信が追善とて佛前に位牌を立て。燈明香華をそなへ。四十八夜も結願にて。早姫繼

若參詣あれば。老若男女群集して。ハツミフシ回向をなすぞ道理や。かくて法然上人は

御弟子あまた左右に具し。高座に上らせ給ひける。源八兵衛廣綱は義經の名代にて。

大黒といふ名馬。判官御秘藏ありけるを。繼信度々所望せしが。朋輩の猜みとて遂に

下し給はず。御愁嘆の餘りにや。亡者に贈り奉るゝと。墓のめぐりを三遍牽いてめぐりければ。馬も毛を伏せ耳を垂れ

しをれし風情ぞあはれなる。暫くあつて志田の三郎參詣す。蓮生座を立つて。やあ御分よぶなは志田の三郎か。我こそ熊谷入道よ。命あれば逢うたよな。まづ此の度は力落し。して忠信驚尾などは見えざるか。三郎

誠の侍とは申すなり。花のやうなる教盛を我が手にかけて討ちし事。なんほう哀れに存する故。侍止めて出家すればその人も佛になり。我が身も佛果ぶつぐわに至るが。是が合點あうてんがまるらぬか。こりや志田の三郎といへば。志田は一念發起して。有難しく最早疑心

信が相果てしより。妻子が嘆き彼是を見るにつけても。いと哀れに候わと。ウレヒヲシ涙を流し。給ひける。法然聞召し。嘆き給ふも理ことわりなり。繼信は君の御用に立ち死したれば成佛は疑ひなし。いで〳〵弔らひ得させんと。虚空に向つて手を合せ。門門不同八萬四千。爲滅無明果業因。利劍りけん是彌陀號みだうごう。一聲稱念罪皆除。南無阿彌陀佛と唱へ給へば。不思議や佛前に立てたる位牌。

志田といへども。更に返答せず。心靜かに回向する。蓮生腹を立て。こりや法師と思ひ近付をもどすか。奉加帳も頼むまい。見ぬ顔するな卑怯者といへば。えゝかしました

事といへば。志田聞いて念佛の功力にて往生せしと聞くからは。見ながら娑婆苦界しあはれくがいに片時も存へ何かせん。腹かきやぶり極樂へ早く往かんといへば。おゝ頼もしき大活だいかつの佛者ぶつしやかな。さりながら如何に念佛申しても。修行の功積こうせきらでは往生はながたし。志田

佛體ぶつたいと顯れ西の空へ飛び給ふ。有難しく驚尾は繼信が憂ありと雖も。軍終らねば塞へも參らず。斯ういふ志田も仔細あつて侍はやめたれども。安西の彈正太郎といふ惡人を討つたるぞ。教盛きやうせいの情なさけがあり。いや無常を観するなどとて軍中より出家する。是

とは何事ぞ。やれ侍はな。親兄に離れても。死骸を押しのけ軍いくさするを武士といふ。忠信驚尾は繼信が憂ありと雖も。軍終らねば塞へも參らず。斯ういふ志田も仔細あつて侍はやめたれども。安西の彈正太郎といふ惡人を討つたるぞ。教盛きやうせいの情なさけがあり。いや無常を観するなどとて軍中より出家する。是

聞きこいて誤つたり〳〵。然らば某出家になり。繼信が菩提を弔はん心なり。はや〳〵出家せさせてたべ。法然聞召し。さて〳〵殊勝の心ざし。蓮生とても其の通り。然らば出家せさせんとやがて。授戒をなされる。見ては後生に入り。強きを見ては從へるを。調しら則ち志田坊とぞ申しける。如何に蓮生繼

右此本は我等持本の通ちがひなく板行致し候初はつ心積しんせき古のためなりさればことん〳〵〳〵〳〵のりかたほどびやらし三蔵をくりのしな〳〵の口傳くちでんは筆紙ふでがしのおよぶきかしこ

京二條通寺町西へ入町
正本屋 山本九兵衛板